
あの日に。

酒主

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日。

【Nコード】

N2738E

【作者名】

酒主

【あらすじ】

1980年代街はキラキラで、不良少年少女が流行った時代。純粹すぎるハルとユウの物語。

0 ハルとユウの物語

今日は出て来た。

今まで我慢してきた。

いいよね。いいんだよね。お母さん……。

「ユウ！ いねえのか？」

ボロボロボロボ

単車の音がして。靴の引きずる音。ハル。

彼は、時々ここにやってくる。私も知ってる。

だから待ってた。

だけど、素直に出て行くのもちよつと悔しい……。

海岸沿いにある、と・あ・る・公園の真ん中。

渦巻き状のカタツムリみたいな滑り台の死角に隠れ、ハルの声を聞く。

「ユウ！」

「ユウ！」

ハルの声が大きくなる。段々近づいてくる。

私はハルの声が近づくにつれ、目を閉じる。

私はハルが好きで好きでたまらない。

「ハル……」

夜の光はピカピカで、彼の後ろに載って眺める街は別世界のように

だ
っ
た。

1・お母さん

私の名前は町田ユウ。この4月から中学生をやってます。

お父さんはいなくて、お母さんが1人。ついでに言えば、お父さんもどきが1人いる。

「ユウ！ ユウ！」

隣の部屋から聞こえてくる、ガラガラ声のこの人がお母さん。髪はふわふわの金髪なくせして「不良なんかになっちゃダメ」というのが口癖。大人はおかしい。

「お母さんね、今から仕事行ってくるから、鍵しめといてね」

「はい」

「もうっ。お菓子食べながら返事なんかして。子供はいいわよね、呑気で！」

お母さんは飲み屋で働いていて、いつも夕方には機嫌悪そうに家を出て行く。長いスカートをヒラヒラさせて、それで、上のシャツはピッタリとくっついていて。自分の母親ながら綺麗だと思う。

私は誰に似たんだろう？

目は小さいし、鼻も上むいてるし、顔もまん丸でお母さんには似ても似つかない。私が小さい時に別れたお父さんに似てるのかもしれない。けど、お父さんの写真は全然ないから分かんない。

お母さんみたいに、綺麗だったら良かったのに。一度、お母さんに聞いてみた。

「私ってお父さん似？」って。

「違うわよ」

「じゃあ、お母さん整形したの？」

そう言ったら「仕事行く前にくだらない質問しないでよ」って凄く嫌そうに答えてきた。やっぱ、お母さんのそういう所が嫌い。顔以外はぜんぶ嫌い。

言い忘れたけど、お母さんに似ているところもある。

ふわふわの髪。

私は結構気にいつてる。

お父さんもどきについて。

この人はいつい最近まで、居候だと思ってた。真面目そうな顔で、時々ごはんをよばれに来る。風呂まで入り泊まってい。く。そしてお母さんのことを「由梨さん」と他人行儀で呼ぶ。お母さんはこの人のことを「あの」とか「その」で呼んでいる。

この人がお母さんと付き合っているとわかったのは、中学生になつてから。今まで気が付かなかった自分も自分だけど、この人の話を友達にしたら、「それ、お母さんの彼氏なんじゃないの？」ってバカにされた。

お父さんもどきは根暗で、全然格好よくない。どうせ付き合うなら、マツチみたいな人と付き合えばいいのに。しかも、私にまで敬語を使つて、どうかしてる。だから、あまり話してあげないんだ。

お母さんが出て行くと、私は鍵をかける役目。

「火事になるから火は使わないで」といつも言う癖に、夕ごはんはボンカレーしか用意してない。

だから、内緒でガスコンロに火をつけて、コトコトあつためる。お腹が空くから、玉子焼きだつて上手に焼けるようになったし、チャーハンだつて作れる。

いいお嫁さんになれるかも、なんて。

私の家はアパートの2階。夜はお母さんがいないので、小さい頃は怖かったけど、もう慣れた。ベストテンやドラマだつて見放題。誰にも文句言われないなんて最高。寂しくなったら、友達の家に電話すればいいし、結構今の生活が気に入っている……かも。

「お母さん！ 何で起こしてくれなかったのー」
時計は8時を指している。

夜中まで、テレビを見てたから遅刻寸前。寝ているお母さんに向かって文句を言うけど、「うっさい」っていう返事。本当に、普通の家庭っていうのに懂れる。

ユウちゃん起きなさい。ごはんよ。

起きたら、トーストと目玉焼きと、私の好きなプリンが並んでいて、というのが私の理想。

妄想はこのくらいにして、何も食べず学校まで走る。飴をつかめるだけ持ってポケットに入れる。お腹が空いたらなめる。

これが私の朝の光景。え？ 早寝して早起したらいいじゃんかって？ 無理無理。昔っから夜型なんだ。私。

「遅ーい」

校門の前で、生活指導の山田につかまる。何故か、手には竹刀を持って仁王立ちしている。生徒をいびる事が、山田の生きがいなんだと思う。

「すみません。寝坊しちゃって」

頭を下げると、セーラー服の胸ポケットに忍ばせておいた飴がポロポロっとこぼれた。

「町田、だったな。1年のくせにたるんだるな。ちよつと職員室に来い」

「えー、でも。朝の会はじめっちゃいます」

「いいから来い」

山田は廊下を歩くとき、威嚇するように竹刀をバンバンと廊下に打ちつけながら進む。四角い顔、七三に分けた髪。太いまゆげ。

途中、上級生とすれ違いジロジロと見られる。

「あいつ、何やったんだよ」

3年生の翔子先輩だ。床すれすれのスカートにパーマ。不良少女と呼ばれてに出てくる人みたいだ。うちの中学校では翔子先輩を知らない人はいない。

山田は翔子先輩には何も言わず、どんどん職員室に私を連れていく。

私、何も悪いことしてないのに。翔子先輩の服装の方が問題あるんじゃない？

山田先生、何で注意しないの？

大人は不思議だ。

ガラガラガラ

山田は大げさに職員室のドアを開けた。担任をしていない先生が3人くらいいて、こつちをじろじろ見ている。その中を通って、校長室の横にある応接間に連れていかれた。

山田は茶色いビニール張りのソファに腰掛けると、足を広げて偉そうに言った。

「お前、この前から遅刻寸前だな」

「はい。あの。お母さんが」

夜の仕事と言いかけてやめた。何も知らない小学生のとき、茜っていう友達の家についていてお母さんの話をしたら、次の日から、茜は話もしてくれないようになった。

中学になって一緒にクラスになってから「あの時はごめん。お母さんがユウとは付き合っちゃダメだって言ったから」って謝ってくれたけど、シヨックだった。きっと私が茜に傷つく事を言って怒らせてしまったんだ、って今まで思ってたのに。まさか話してくれない理由が、私のお母さんにあつたとは思ってもいなかった。

だから言わないことにした。

「お母さんが？ 起こしてくれなかったでもいいたいのか。もう中学生だろ。しっかりしろ」

パンツと竹刀が床を叩いたので、私はビクリしてしまった。山田は驚いている私の顔を見て満足気な表情をしている。

「それから」

山田は必要以上に大声を張り上げた。

「髪、染めてるのか？ やけに茶色いじゃないか」

「地毛です」

「地毛なんて言葉知ってんのか！ そんな事言う奴に限って染めて

んだよ」

なんか、ドラマみたい。この先、髪の毛つかまれて殴られるのかな？ 私。

ガラガラガラッ

救世主がやって来た。

「ま、町田さん。どうしたの？」

担任の森あや子先生。顔は、菊池桃子と斉藤由紀を足して、んーと、とにかく可愛い感じ。私の代わりに必死に山田に頭を下げている。

「森君。もうちょっと生徒に厳しくしないと、なめられますよ！」

「すみません。私からも言って聞かせますので、もうよろしいでしょうか？」

「それと、町田の髪の毛、茶色いから親御さんに電話しておいた方がいいな。あー、そうだそうだ。学校に飴を持ってきたことも言っ

といてくださいよ」

「は、はい。わかりました」

あや子先生は私の腕を優しく握って、職員室から救出してくれた。

「先生、ありがとう」

「うん」

先生に連れられて、教室に入った。朝の会の途中だったらしく、全員がこちらをジロジロ見る。なんか、やだなあ。この感じ。

「おい、ブス！ 何やったんだよ」

クラスの格好つけの慎也が口火を切った。学制服の下に赤いＴシャツを着て、わざとみんなに見せているようだ。もちろん、制服の袖もクルクルと折っていて、アイドルの真似をしてみたい。それなのに、一步教室から出ると、袖も几帳面に元に戻して、しかも襟もしっかり留めて、赤いＴシャツがみえないようにしている事をみんな知ってる。

小心者の格好つけ。

そんな男子のことはどうでもいいので、さつさと席に着いた。

「何だよシカトする気か？ ブス」

「やめなさい。町田さんは少し遅刻しただけです」

あや子先生はコホンと咳払いした。白いブラウス、黄色のカーデイガン。フレアースカート。男子の中でもあや子先生に憧れている人はいるみたいだ。

こんな人がお母さんだったらな。

そんな事を思った。

2・私の友達

私が通う港南こうなん中学校は、港南小学校と佐倉小学校の2校の生徒が集まって来ている。港南地区は、古くからの団地の人が多くて、佐倉地区は最近できた住宅街なので、新しく越してきた人が多いってお母さんが言っていた。

私がよく遊ぶ友達は茜、美穂、弥生の3人。茜と私は港南地区で、あとの2人は佐倉地区に住んでいる。中学校にあがってから、まだ2ヶ月あまり。美穂と弥生は本当にこの先も友達でいるのかどうかは分からない。けど、今の所、一緒にいて楽しい。

「ユウ！ 今日放課後遊ばない？」

ショートカットの美穂だ。2人でトイレにも行く仲になったのがちよつと嬉しい。

美穂は、小学校の頃からソフトボールをしていて、体もごついし、顔も真つ黒で、よく男の子と間違われている。

「珍しいね、美穂が誘うなんて」

「今日ね、監督が出張で、クラブ休みなんだあ」

5月だというのにもう日焼けしている顔に、真つ白い歯がのぞく。美穂があまりにも嬉しそうに笑うので、つい私もニコニコ笑う。

「ねえ、茜と弥生も誘おうか」

「うんうん賛成！」

トイレから戻って教室を見渡すと、一番後ろの席の弥生の周りに女子が7、8人群がっついていて、何やらキヤーキヤー騒いでいる。その中に茜もいた。

「茜っ」

「うわっビックリしたあ」

「ねえ、何見てるの？」

「明星よ、みょうじょう」

明星と言ったとき、茜が思いつきり小声になったので、つい私も口

をおさえてしまった。

弥生の手には「週刊 明星」と書かれた雑誌があつて、表紙には最近流行つてゐるチェッカーズときよんきよんの写真が載つていた。

「ねえ、マツチと俊ちゃんに結婚を申し込まれたら、どっちにする？」

「えー、究極の選択だねー。そんならさ、生まれ変わるなら、明菜ちゃんがいい？ それとも聖子ちゃん？」

「んー。きよんきよん」

「美穂だったら、もうー！ 答え違つじゃんっ」

私はみんなの輪の一番外から、弥生が持つてゐる雑誌をのぞきこんだ。

いいなあ。私も今度買つてもらおう。お母さんが買つてくる本つて言つたら、学研のやつとか「中学１年生」つてやつ。あんまり面白い物にも連れてつてくれないから、最近の雑誌のことなんか全然分かんない。

それにしても弥生の持つてゐるものは、他の子より上な感じ。しかも、弥生ん家は佐倉団地にあつて、新築でピカピカらしい。本当にうらやましい。

神様お願いつ。１日だけでもいいから、私が明菜ちゃんになつて、お母さんがあや子先生になつて、ピカピカの家に住むつてのはどう？ 無理だよな……。

「おい、ブス！ だけ」

格好つけの慎也だ。大つきらい。

「シカトすんな、だけよ」

最近、妙に私だけにつつかかる。いじめてるつもりなんだろうけど、全然怖くないし。知らん振りして、どいてやらなかった。

慎也は腹をたてて、私の机を蹴つ飛ばした。

雑誌を見てキャーキャー騒いでた他の子達も、机が倒れる音にビツクリして慎也の方を見た。

「ちよつと、ひどいじゃないの！ ちゃんと戻しなさいよ」

美穂が大きな声を出した。美穂の声につられて、弥生の周りにいた女子が皆、声をあげた。

「ひどーい」「最悪ー」と口々に言うもんだから、慎也は頭から火がでそうに怒って。それを見てたら可笑しくなった。

みんなが味方になってくれて嬉しい。

だけど、とても気になる事があった。なんで茜は黙ってたんだろ
うな。

美穂も弥生も慎也を攻撃してくれてたのに……。すごく気になる。
もしかして、茜ったら慎也のこと好きなの？ まさかね。

「ねえ、弥生。 今日放課後あいてない？ ユウとみんなで遊ぼう
よ。ね、茜はどう？」

美穂が急に話題を変えた。

「うわー。ごめん。今日ピアノがあるんだあ」

弥生は顔の前で手を合わせて、ごめんのポーズをとっている。「
ピアノ休もうかなあ」なんて、真剣に迷ってるみたいだった。

「弥生はピアノ習ってんの？ お嬢様じゃん」

「ユウったら。やだ、そんなじゃないってー」

「ね、そんで茜はどうなの？」

さつきから浮かない顔をしている茜に、声をかけてみた。小学校
の頃から知ってるけど、茜の気分屋には慣れている。

「うん。行こうかな。だめだったら電話する」

茜の返事。

茜がこうやって眉間に皺を寄せながらも、作り笑いする時は気が
のらない証拠だって事を知ってる。茜は2つに分けた髪の方
を指でくるくる絡めてはほどき、絡めてはほどきを繰り返している。
多分、茜は来ない。

何にも知らない美穂は「じゃあ、いつペン家に帰ってから4時3
0分に「ブーケ」の前に集合！」ってガッツポーズを決めた。

ブーケは佐倉地区に新しくできた雑貨屋さんで、弥生いわく、文
房具や歌手の写真なんかも置いてるって聞いた。私はまだ行ったこ

とがないので、すごくワクワクする。茜も来ればいいのに。

「ただいまー。お母さんいる？」

鍵が開いてるからいるんだろうけど、つい聞いてしまう。

「うん、おかえり」

お母さんが「おかえり」って言うってくれる時は大体機嫌がいい。機嫌が悪いと「おかえり」の代わりに「遅かったわね」とか「部屋の掃除しなさい」とか言うのでわかり易い。

運が良かったら、お小遣いをくれるかもなんて、少し期待をしてしまった。

「ね、お母さん」

「んん？」

お母さんは、食卓のテーブルに座って珈琲を飲んでいる。仕事に行く前の儀式みたいだ。昼間はもったいないからって、部屋の電気を消しているの、日当たりの悪いこの部屋は余計暗くなってじめじめして、なんかやだなあ。弥生のピカピカの家を想像すると、益々この家がいやに思える。

「ね、ね、お母さん」

お母さんが振り向かないので、何度も呼びかけた。

「何？ 頼みごと？」

「うん」

私がお母さんの事を分かり易く思うのと同じように、お母さんから見て私は分かり易いのもかもしれない。お母さんの子供だから、当たり前か。

「何？ はっきり言いなさい。グズグズしてんのは嫌いだからね」

お母さんの機嫌が悪くならないうちに、私は慌てて、美穂と買い物に行く事を話した。

「そ、珍しいわね。はいっ」

「え？ 1000円もくれるの」

「いらなかったら、しまうよ」

「やだやだやだ」

あっさり1000円をもらった私は、制服のまま待ち合わせ場所に向かった。

3・出会う

自転車に乗って、風を感じるのが大好き。特に、春の風は気持ちいい。これから先、何回春が来るかしかないけど、この風の匂いは忘れない。おばあちゃんになったって、今吸った、私の胸の中にある空気の記憶はなくならないと思う。

アパートを出て、自転車にまたがり、私は学校の前まで来ていた。学校を少し通り過ぎた交差点を右に曲がると、佐倉団地に続く道がある。そこは新しく整備された道で、学校で言えば新校舎につながる渡り廊下って感じ？

佐倉団地が遠くに見え、それら全体はピカピカに見えた。

団地へと続く道は上り坂になっていて、ギアについてない私の自転車は勢いを失い止まってしまった。そこから先は自転車を押しトボトボと歩いた。

ヴオーーーーーヴオ

団地の方から、大きな音をたててバイクが下ってきた。

バイクが通りすぎると、フーーーーツと後から風が舞い上がり、私の髪をくしゃくしゃにした。

バイクに載っていた男の子は金髪で、顔はよく見なかった。どっからみても正真正銘の不良だ。慎也の様にまがいもんじゃない。

それにしても、佐倉団地に続く坂道は急で、自転車を押しながら思った。美穂と弥生は、毎日この坂を上って帰るんだって。しんどいな。

ヴオヴオヴオヴオ

私が坂を上りきった頃、下っていったはずのバイクが戻ってきた。背面から聞こえてくるバイクの轟音は次第に失速し、私の後ろで止まった。

何だか嫌な予感。

「おいっ」

ヤンキーさんの声が背後でした。少しかすれた様な声……。

関わっちゃダメだ。私は聞こえないふりをして自転車にまたがろうとした。

「シカトすんなよっ、中ボー」

後ろにいたはずの不良は私の前に回りこんで、行く手を遮った。

その時、ふわっと風が舞って、不良の金色の前髪が後ろへなびいた。日差しを受けたその顔はとても綺麗で涼しげだった。切れ長の目のせいかもしれない。男の人なのに綺麗だと思った。

「なあ。お前、港南中だろ？ 翔子の家知んない？」

彼は苗字は言わなかったけど、多分翔子先輩のことだ。目の前にいる金髪の男の人は、翔子先輩のなんなんだろうか。

「知らない。私1年だから……」

不良はしばらく私の顔を覗きこんでニヤツと笑った。やんちゃそうな顔ってそう思った。

「じゃっ、これあいつに渡しといてくれる？」

彼はポケットから紙切れを取り出して私に握らせた。

そんなん無理。無理、無理、無理。

翔子先輩と話をしたこともないし、第一、私が渡すっておかしい？ 絶対おかしいよ。

「だめだめ、無理っ」

私は紙切れを返そうとしたけど、彼はエンジンをかけ去って行った。

「ちよつとー！ 無理だつてー」

バイクにまたがった彼の背中に呼びかけたけど、あっという間にいなくなってしまった。

人の都合も考えず何て自分勝手な人なんだろう。

そっか。自分勝手だから不良なんだ。

それにしても、この紙切れ。何を書いてあるんだろう。それで、どうやって翔子先輩に渡したらいいんだろう……もう。何か変なことに巻き込まれなければいいんだけど。美穂と買い物するどころじ

やなくなってきた。段々と気が重くなるのを感じた。

団地に入ってすぐの角を右に曲がると、ブーケと書いた店がすぐに見えた。一軒屋くらいの大きさで、そんなに広くない店内は、他の女子中高生であふれていた。中でも、アイドルの写真やポスターの前に、みんな群がっていた。

店の前で美穂が手を振っている。

「ユウ！ 茜は？」

「うん、電話も無かったし……来ないんじゃないかなあ」

「ふーん。ま、いつか。中に入ろうか」

しばらく、ごった返す店内に入っていて、他の女子中高生のようにアイドルの写真やらポスターに見入っていた。

「ユウ。いいの見つかった？ 私、これ買うわっ」

美穂は嬉しそうにきょんきょんのポスターを選んだ。他にもシャーペンや匂いのする消しゴムなんかを手持っていた。結局私はというと、頭の中が買い物どころじゃなくて、どんどん気が重くなっていくばかり。

でも、何も買わないと、誘ってくれた美穂に悪いし、適当に選んで買った。

お金を払って、外へ出た。美穂はきゃっきやと話ながらよく笑う。外見は男の子みたいだけど、話すととても可愛い女の子。私はそんな美穂が好き。

美穂に出会って、覚えたこと。

人は外見と違う。ってこと。

「どうする？ これから」

「うん、帰るね」と美穂は言った。「もつと遊びたいんだけど、家、厳しいからやんなっちゃう。6時が門限だよ！ あり得ないよね」

美穂は口をとがらせて言った。

門限か。私の家には無いこと。

夜は誰もいないんだもん。帰りが遅いって叱る人もいない。

普通の家の美穂がうらやましいよ。

「私も遅くなると怒られるから、帰るね」

なぜだかわからないけど、美穂に嘘をついてしまった。怒られなきゃしないのに。

「今度、休みの日にゆっくり遊びたいね。」

美穂とはここで別れた。

長く急な坂道をあつという間に下り、家へ向かった。車どおりの多い海岸沿いの道を進むと潮の香りがした。また、ふわつと風が舞って、自転車を止めた。

預かった紙切れ。何が書いてあるんだろ。

ふと、そんな気分になって自転車を降りた。

カサカサカサ

ポケットから紙切れを取り出してみた。

大学ノートを切り取ったような感じ。4つ折になっている。思い切って開けてみた。

『T o 翔子

今度集まりあるから、電話して

b y やす』

手紙の下の方に、電話番号が書いてあって、その横には下をペロツと出した表情の男の子のイラストが書いてあった。イラストの男の子はピースをしていて、可愛く描いてあった。

絵、上手なんだぁ。と感心したけど、次の瞬間驚いた。

吹き出しの中に「一回させて」の文字。

何だか大人な感じの手紙。

私だって「させて」の意味くらいわかる。

「あーもう。こんな手紙、翔子先輩に渡せる訳ないじゃん」
しばらく、金髪の彼と翔子先輩のことで頭がいっぱいになった。

4・手紙

美穂と買い物を済ませ、私は海岸沿いの道を進んだ。

その間中ずっと、不良少年から渡された手紙のことを考えていた。翔子先輩に渡すべきか、渡さないべきか。頼まれたから渡さなくちゃいけない様な気もするけど、受け取った翔子先輩のリアクションが予測不可能なので、怖い。最悪の場合は手の甲に焼きを入れられて、トイレでボコボコにされる……？

渡さなかったらどうなる？ 集まりにこない翔子先輩が責められ、それで、それに怒った翔子先輩が他の不良達を引き連れ、1年の教室に来る。そこで私は校庭中を引きずりまわされ、そのまま海まで連れて行かれ、海に投げ込まれる……。

まだ、トイレでボコボコにされた方がまし。

気がつくと、海岸沿いに最近作られた公園のベンチに座っていた。横目で時計を確認すると針は7時を指していた。辺りは薄暗く、ベンチから見下ろした海は真っ黒に見えた。後ろは、さっきまで通っていた道。車のヘッドライトが背後でめまぐるしく行き来しているのを感じた。

こんなに帰りが遅くなったのははじめて。

そして、夜の街もはじめて。

いつも夜は部屋で1人きり。テレビとにらめっこの毎日。友達に電話をかけてもすぐに切られる。決まって「お母さんが長電話なんてやめなさいって言うから」っていう理由で。

「つままない、つままない、つままない」

呪文のように独り言を繰り返した。波の音は、車の音にかき消されてほとんど聞こえない。

私の言葉だつて誰にも聞こえない。

「寂しいよ……」

つい本音が出た。

昨日ほとんど寝られなかった私は、朝の4時頃に眠ってしまい、そして今にいたる。

8時15分。

どんだけがんばっても、遅刻間違いなし。仮病を使って休むっていう手もあるけど、手紙を渡すという使命が私にはある。重い頭を抱えながら、制服に着替えた。

「ちよつと、ユウ！ まだ学校行つてないの？」

ふすまの向うから、布団で横になってるだろうお母さんの声がする。一応、心配はしてくれてるみたい。

「お母さん、学校に電話して！」

「は？ 何」

いつもの嫌そうな返事。

「何でもいいから、遅刻の理由を作って電話してよ」

「あんたが寝坊したのが理由でしょ。それ以外にどう言えっちゅうの？」

「ユウは低血圧で、起きられない体質って医者が言ってたので大目にみてくださいとか」

「バカッ。今なら、まだ朝の会だから、グダグダ言っていないでさっさと行きなさい！」

「あ、いい事考えた。朝起きたら自転車被盗まれてて、探してたら遅くなった、とかどう？」

ふすまの奥はシーンとしている。きっとお母さんは学校には電話をかけてくれない。娘が学校で先生にいびられても、平気なんだ。こんなにも私は苦勞してるのに。

「お母さんのバカッ」

嫌々学校に向かった。

学校に近づくにつれ、自転車をこぐスピードが少し落ちたように思う。早く行かなくちゃという気持ちとはうらはらに、体は学校に

対する拒否反応に支配されている。学校に対するっていうか、生活指導の山田にだって言った方が正しいかも。

校門がみえてきた。いつもは、ワイワイとしている校門前も、案の定、朝の会がはじまっている時間である。ひっそりとしていた。「ラッキー」

山田の姿が校門前にないので、思わず口ずさんでしまったが、いないと思った山田は校門の内側でタバコを吸っていた。

「おいっ。町田！ またお前か」
「ひゃっ」

卵を割ったらひよこが出てきた位の衝撃だった。校門の影に山田が隠れてるなんて思いもなかったから。

山田はタバコを砂に押し付けて、火を消してから「職員室へ来い」と応援団長のような口ぶりで言った。

校門の横にある自転車置き場へ自転車を置く間、山田は私の背後にいて、ねつとりとしつこそうな目で威嚇する。本当に、お母さんのバカ。電話をかけてくれていたら、可愛い娘はこんな目に合わなかったんじゃないの？

「先生、私、逃げませんから、先生先に職員室へ行ってください」
あまりに、しつこい目線だったので、思わずそう言ってしまった。この前みたいに、山田に連れられて職員室に行くのは目立つから嫌また他の子達に噂されそうだし。新学期そうそう変なイメージがつくのはどうしても嫌。

「何だと、お前反省してない様だなっ」

「いえ。そんなつもりじゃ」

「言い訳なんて100年早いぞ」

山田の耳は口バの耳かもしれない。生徒の訴えは聞かないような仕組みになっている。

私の言葉に余計逆上してしまった山田は、私の首根っこをつかまえた。悔しくも山田に引きずられながら廊下を歩くという格好になっってしまった。

丁度朝の会が終ったようで、職員室前の廊下は、音楽室に移動する生徒や、運動場に移動する生徒がバタバタとあわただしく行き交っていた。他の生徒にみせつけるようにパフォーマンズする山田を恨めしく思った。

他のクラスの子や上級生がジロジロと私を見た。

「あいつ、髪の毛なんか染めてえらそうだな」

ざわざわする廊下の中からそう聞こえた気がする。染めてなんかいないのに……。

人の噂の8割は嘘でできている。と最近私は思う。

職員室に連れていかれ30分が経過。1時間目はもう始まっている。生徒の学習する権利を奪ってもいいのですか？ 先生。

「……だから、わかったな。明日までに反省文。原稿用紙5枚つ！」
やっと開放された。

ポケットの中身まで丁寧に出すように言われ、かばんの中の持ち物までチェックされた。

先生に言われてから飴は持って来ないようにしたし、規則違反のものは何も持ってきてない。それにしても、ノートにはさんだ手紙がみつかったら大変だ。私は気が気じゃなかった。

何でこんなに目をつけられるんだろう。本当に嫌になる。

職員室を出て、シーンとした廊下を静かに歩き教室に向かった。

1年の教室は1階にあつて、私のクラスの5組は廊下の突き当たりにある。

深呼吸をして、5組の後ろの戸を開けた。

「また遅刻かよ！ ブス」

目立ちたがり屋の慎也だ。また、いつものように無視をすればいいって思った瞬間、慎也の足にひっかかって、私は地面に倒れこんだ。

「いったー」

膝を打った。自分でも大げさだと思っ程、膝から出た血は、脛を伝って床に落ちた。これには憤也もびっくりした様子で、私は痛いと思うよりオロオロとした憤也の顔を見て、ざまあみろっと思った。「先生、町田さんが怪我してます」

数学の梅岡がやつと騒ぎに気付いて振り返った。梅岡は、数式の途中で邪魔されたと言わんばかりに不機嫌で、面倒くさそうに「誰か保健室に連れて行ったってくれ」と言った。

ハイ！ って美穂の声が聞こえたが、疲れていた私は「1人で行けます」とうつむいたまま出て行った。

5・居場所

私は足を引きずりながら、職員室の隣にある保健室に初めて入った。

「5組の町田です。足を」

50代くらいのパーマをかけた何処にでもいそうなおばちゃんが、保健室の先生。入り口で立っていると、にっこりとして寄ってきた。「はじめまして。それにしても、まあ派手に出血したのね。痛くない？」

「はい。あんまり」

「そう。消毒するからここへ座ってくれろ？」

おばちゃん先生は私を椅子に座らすと、棚から救急箱を出して傷の消毒をはじめた。

「そんなに傷は深くないわ。大丈夫。どうしたの？ 転んだの？」
久しぶりに人から質問をされた気がした。

日当たりの良い保健室。横に見えるベッド。昨日あまり寝ていない私は、急にそのベッドに眠っていたくなった。だから、痛くもないのに大げさに振舞ってみせた。

「やっぱり痛くなってきました。横にならせてください」

怪我人らしく弱々しい声を出してみた。

おばちゃん先生は、私の嘘に騙されたのか騙されなかったのかわからないけど、すんなり「そうね、寝てらっしゃい」と言ってくれた。

「先生、ありがとう」

後で起きる事も知らずに、私はその白い布団の中にスルスルとめぐりこんだ。

どれだけ寝たのだろうか。今、何時間目だろうか。なんて寝ぼけ

た目をこするとカーテンを隔てた向うでおばちゃん先生と誰か女子生徒が話しているのを聞いた。

「あなたが悪いんじゃないんだから、大丈夫よ。お母さんわかつてくれるわよ」

「わからずやのババアだから何を言ってもダメさ」

「それはだめよ。誤解されたまんままでいるっていけない事よ」

「でも、どうやって説明すんだよ。きつと話すだけ無駄だつちゅうの」

「悪いくせね、翔子ちゃん。きちんと親と向き合わなくちゃ」

翔子先輩じゃん……。何故か「まずい」っていう感情になって、私は布団をすっぽり頭からかぶった。

翔子先輩の家も何か複雑そうだ。親のことをババアって呼んでいた。途切れ途切れにしか聞こえないので何の話をしているかわからないが、聞いているうちに翔子先輩が可哀想に思えてきた。「何を言っても信用してくれない」ってもらしていた。

うちの場合はどうだろう。信用とかそんなんはわからないけど、何を言っても聞いてくれないってところか。今度ババアって言ったら、お母さんどんな顔するだろう？

いろいろ考え事していると「町田さん」っておばちゃん先生の声がした。

布団をすっぽり被っている私の傍まできて、ポンポンって布団を叩いた。

「もうすぐ給食よ、どうする帰る？ お母さんに連絡しましょうか」
そんなに寝てしまったのか。翔子先輩はまだ保健室にいるんだろうか？

とりあえず質問に答えなくちゃと思って、私は布団から飛び出した。

「お母さんは夜仕事なんで、今電話しても寝てます。多分」

「そう、町田さん夜はお父さんと一緒なの？ きちんと寝れてる？」

「いえ、お父さんはいません」

おばちゃん先生は、何かかわいそうな子を見るような目で見
た。

「じゃあ、夜はあなたの他に大人は？」

「いません」

「まさか、1人なの？」

そんなに驚かれるとは思ってもなかった。物心ついた頃からそんなだったから。確かに人と環境が違うのは最近になってわかってきたけど、おばちゃん先生の顔を見ていたら急に不安になった。

私は夜1人でいることは全然平気。これから先もその生活が続く。そんな顔で見られたら、自分が可哀想に思えてくる。やめて、先生。
「1人だけど全然平気」

私はお決まりの台詞を口にした。でも、今日は上手く言えなかった。最後の方は下唇をぐつとかみしめて……泣きそうになったのバレてないだろうか。

「疲れてるのかもね、町田さん。給食、ここで食べる？ そうね、そうした方がいいわね。クラスまで取りに行つてあげるから待ってね」

私は何も言っていないのに、先生はユサユサと体を揺らしながら保健室を出て行った。

「ふうー」

ため息が出た。ため息をするとどんどん幸せが逃げるっていう。

私の体の中からどんどん幸せが逃げていくのがわかる。

「お前、この前の遅刻の奴だな。名前は？」

急にカーテンが開いて、翔子先輩の顔がのぞいた。

「町田です。町田ユウ」

「選挙かお前っ」

「すみませんっ」

茶色に染めてくるとパーマのかかった髪。まともに顔も見たこともなかったけど、よく見るとすごく綺麗。中森明菜に似てるかも。親に殴られたらしく、左目の周りに青くシャドーがかかっている。

て、より一層迫力を増している。今、こうして話してるのが嘘みただ。

「あのさ、話聞いちゃったんだけどさ、お前夜1人で留守番か？」

「あ、はい」

しばらく沈黙があつた。翔子先輩まで私に同情してるのか。そう思ったとき。

「うらやましいヨー」

って、翔子先輩は少し舌を巻いた感じで言った。うらやましいなんて言われたのは、多分はじめて。いつもガン飛ばしてる翔子先輩とは程遠く、無邪気な様子に私は惹きこまれた。保健室もそう、翔子先輩も。何か私の居場所って感じがする。きっと。

「うちなんかよ、暴力親父とわからずやのババアと赤んぼの3重苦を背負ってんだぜ。時々、赤んぼのオムツまで替えさせられるし。

ためえらだつて、赤んぼできるようなことしてるつつうのに、男と会ってただけでポコポコだぜ。ム力つく」

弾丸のように翔子先輩の口から言葉が飛び出す。途中、翔子先輩が「男と会って……」っていった時、例の手紙のことを思い出した。今、渡すチャンスだ。

「あ、あの。翔子先輩」

先輩はまだ話に夢中だったが、私が声をかけたので不思議そうに私のことを見た。上目遣いをされると、やっぱりビビる。

「先輩はいらねえよ」

「あ、の。翔子……さん」

「だから、何だ」

スイッチが入った翔子先輩はやっぱり怖い。でも今がいいチャンスだ。勇気をふりしぼって続けた。

「昨日、やすつて人から手紙を預かったんですけど」

「はアーん？ お前、やすさん知ってんのか？」

ヒョエー、眉間に皺を寄せて睨まないでください。そして、トイレでポコポコにしたりなんかごめんです。

「い、いえ。通りすがりに手紙を渡してくれて。手紙にやすって書いてあったから」

「お前、手紙みたのか？」

「あ、ご、ごめんなさい」

「どうでもいいけどさア、そいつ車だったか？」

「いえ、バイクで。あの、前髪が金髪で、目がこんなんです」

私は両方の目じりを上げて真似してみた。

「あはははははっ。おもしろなお前。その人はハルさんだよ。んで、手紙は？」

「あ、いつけない。教室に」

そう言ったところで、おばちゃん先生が2人分の給食と私のかばんを持ってきた。

「いいタイミングじゃんドラちゃん」

「まア、またそんな名前で呼ぶう」

保健室のドラちゃん先生は、翔子先輩の肩に寄りかかって、よしよしってする様にパーマのかかった髪を撫でた。この先、私はこの保健室で何度もお世話になることになる。それだけ、居心地が良くて私の場所。そう思えるところだ。

早速、かばんの中から例の手紙をだして、翔子先輩もとい翔子さんに渡した。中身をみて翔子さんはゲラゲラと大うけしていて、昨日心配していた事はあっけなく解決した。

「やすさんって格好いいんだ。お前も会ってみるといいよ。今度集まりあるし。どうせ夜はお前1人だろ？」

「うん」

「お前んちってどの辺？ 迎えに行つてやるよ」

翔子先輩と一緒に給食を食べながら話した。それにしても急な展開でびっくりした。翔子さんと話せるとも思ってたし、まさか一緒に遊ぶ約束までするなんて思ってた。もう1つビックリした事があった。翔子さんは、汚い言葉使いの割りには、上品な食べ方をする。てつきり、肘なんかついて食べるって思い込んで

たから。

人は見かけによらない。

この言葉を思いついた人は立派な人に違いない。

6・反抗

給食を食べてから、翔子さんはもうひと寝入りするからって、保健室に残ったんだけど。私は保健室にいる気も、教室に帰る気にもならずそのまま家へ向かった。サボるのは初めてだしサボってる自分に驚いている。それにしても、今日はいろいろな事があった。

翔子さんの顔を思い返してみる。好奇心旺盛で優しい目は新しい発見だった。そして、佐倉団地に続く坂道で出あった不良は「ハル」っていう名前だったことも知った。光を受けてキラキラ光る金色の髪が、風を受けてふわっと舞い上がる場所、かすれた声、切れ長の目、やんちゃそうに笑うところが何故か頭の中から離れない。こうやって、自転車をこいでいても、バイクの音が後ろからするたびに、もしかして？　っていう気になってしまふ。あさっての夜に集会と呼ばれる集まりがあるみたいで、翔子さんに誘われた。そこにいけば彼に会えるのだろうか。手紙の主の「やす」って人にも……。いろいろ考え事をしていたら、この前の海岸沿い公園にさしかかった。夜見た海は真っ暗で、不安に飲み込まれそうだったのに、目の前にある海はキラキラと光が乱反射してとても楽しそうに飛び回ってるみたい。私は吸い込まれるように公園に入って行った。

最近出来たばかりの公園はこじんまりしていて、ベンチと時計台、ブランコと少し変わった形の滑り台があった。何の変哲もない公園で、これといって子供たちが遊んでいる様子もない。誰が何の目的で作ったのかわからないけど、私が暇をつぶすにはもってこいの場所になりそう。今帰ったら、お母さんに怒られるかもしれないし、言い訳を考えるのも面倒くさい。そんなところ。

「あんた学校はどうしたの？」

ベンチに座っていると不意におばさんの声がした。振り向くと、くるくるときついパーマをかけたおばさんが歩道から険しい顔でこちらを見ている。こんな時間にボケーツと海を見ていたら、そら怪

しまれるのは仕方が無い。言い訳を探していると、おばさんは呆れたような顔になって「言えないならいいけど、お母さん心配するよ」とおせっかいを焼いた。

心配なんか……って喉元まで言葉がでかかったけども、知らないおばさんに言っただって仕方が無い。でも何でだろう？　今まで普通に暮らしてきた。不満はあったけど、今よりもっと小っちゃい頃もがんばってきたのに。最近の私はどうしたんだろう。すごくイライラして、悲しくて、そして寂しい。

「やだ、あんた。おばさんね怒ってんじゃないよ」

私が泣き出したのでビックリしたらしい。その場に居辛くなったので、ビックリするおばさんを後にして家の方へ自転車走らせた。今までしまっておいた涙がどんどんどんどん溢れ出す。泣きたくないのに。

泣きながら自転車に乗っている姿は、さすがに誰にもみられたくない。私はものすごいスピードで走っていて、気が付くとアパートの前まで来ていた。

今日は「ただいま」も言わず、そつと家に入った。

「おかえり。今日は早い日なの？」

最近のお母さんは機嫌がいい。自分から「おかえり」だなんて珍しい。

「うん。そう」

一生懸命涙を拭いてきたつもりなのに、お母さんにはわかったらしい。通りで出会ったおばさんと同じように驚いた表情をしていた。何だ、お母さんでも私のこと心配するのか？　ってそう思った。

「何、その顔？」

「うん。転んだら痛かったから」

私は膝に大げさに巻かれてある包帯を指さして言った。

「あはは、ユウはまだまだガキだね」

人の気も知らずお母さんは笑った。本当に機嫌がいいらしい。笑った姿なんて久しぶりのような気がする。いつも暗く珈琲を飲んでる姿しか思い浮かばないから。

私が不思議そうにお母さんの顔を見上げると「今日はお母さん休みもらったから、どうか食べにいかない？」ってそう言った。

「うそ？」

「あんたに嘘ついてもしようがないでしょうが」

「やったー！」

やっぱり私はお母さんの言う様にガキなのかもしれない。本当に本当に本当に久しぶりの外食に浮かれていた。急いで部屋に入って着ていく服を選んだ。

「これがいいかなアー」

着替えてはお母さんに見せて「ちよつとダサいわね」って言われるとまた替えての繰り返しで、30分ほどかかってやっと決まった。赤と白のギンガムチェックのシャツに黒の吊りずぼん。裾をくるくるって折って。そう今日のテーマはチェックカーズ？ なんちゃつて。

だけど、私の幸せはいつだってつかの間。ピンポンと呼び鈴が鳴って、お父さんもどきが入って来たのでげんなりした。お母さんが休みの時に、もれなく付いてくるお父さんもどき。喋るわけでもなく黙々とごはんを食べ、寝る前にウイスキーを飲む。「もどき」について知っているのはそれ位。遊んでくれるわけでもなく、何を話すわけでもなく、私には不思議な存在で仕方が無い。

私がイライラしてる原因は「もどき」にもある。せつかくのお母さんの休みにわざわざ来ることないのに。何だか私とお母さんの生活を邪魔されたような気がして本当に腹が立った。許せない気分ではいっぱいになった。

「やっぱ行かない。お母さん達、2人で行って来て！」

「何で。あんたの好きな焼肉よ」

もどきは食卓の椅子に図々しく座ってこちらを眺めている。

あの人大っ嫌い。そんな文字が浮かんだ。今まで、嫌いなのに言わなかったのは、お母さんが可哀想だったから。いろんな事が重なって、私の我慢を入れる箱がいっぱいになって来ているのが自分でもわかる。

「お母さんと2人だったら行くけど」

「何それ？」

「あの人大大嫌い！ ユウの家に連れて来ないでっ」

「そんな言い方」

お母さんは不機嫌な顔をさせたら天下一品だ。あの顔を見ないで済むように精一杯おべんちゃらを使ってたのかもしれない。

「私、絶対行かないから！」

自分の部屋に入るとき、わざと大きな音をたてて戸を閉めた。

「ユウちゃんの気も考えずにごめん。僕は、今日は帰ります」

「すみません。せつかく誘ってくれたのに」

ふすまごしの会話。聞きたくなくても耳に入ってくる。私のせいで外食がなくなったから、お母さんはきつと怒ってるに違いない。

明日の朝まで絶対出るもんかって覚悟を決めた。

ぐーっとお腹の虫が鳴った……。

7・窓の外

楽しみにしていた外食はうらぎられ、何も食べずに籠城した私だった。そのまま眠ってしまったみたいで現在、夜中の3時半。今、こっそりと冷蔵庫を開けているところ。

冷蔵庫の中にはハムとチーズ。食パンの残りがあったので、パンにそれらをはさんで食べた。部屋は全部で3つ。玄関入ってすぐ左がお風呂、そしてトイレ、キッチンの順になっている。玄関入ってすぐ右の6畳間は私の部屋、ふすまをへだてて奥がお母さんの部屋になっている。というわけで、お母さんの部屋とキッチンは隣り合わせになっている。なので、細心の注意を払って冷蔵庫の開け閉めをして、食料を確保した後は速やかに自分の部屋に戻った。

「はアー。疲れる」

パンも音をたてないように、焼かなかったので、なんか美味しくない。それでも何も食べないよりはましだと思うことにした。勉強机に腰掛けながら、パンをむしゃむしゃ食べていろいろ考えた。今晚の集まりのことを。

茜や美穂、弥生が翔子さんの事の事を知ったらどう思うだろう。やめた方がいいって言うだろうか。茜は頭が良くて優等生を絵に描いたような性格だから、きつとまた話をしてくれなくなるかもしれない。美穂はどうだろう。きつと、私のことを心配してくれる。私が部屋にこもっている時に足のけがを心配して電話をかけてくれた。た。弥生は？ 弥生なんかにはわからないだろうな。お嬢様だから何でも新しいものばかり持っている彼女には反抗する材料が無いように思える。家だってピカピカだし、きつと何でも買ってくれる優しい両親に育てられたんだろうし。

夜中に悩んでいることについて考え事をする、大抵取り返しのつかないくらい暗い気持ちになる。パンの最後の一片を頬張るとまたベッドに潜りこんだ。

また、山田に怒られないように目覚ましをきちんとセットした。
「あ！」

忘れてた！。「明日までに反省文。原稿用紙5枚っ！」って言う
山田のねっとりした口調が頭をよぎった。

「バカ！ バカバカッ」

枕を壁に投げつけた。

朝、あれから反省文を書いていたので寝る時間がなかった。その
おかげで遅刻は免れたけど、気持ちはどんよりとしていてどうもス
ッキリしない。

昨日休みだったお母さんは起きていて朝ごはんを作っていた。

何？ 昨日の事怒らないの？ 珍しい。

「おはよう」

「……」

「ごはん食べないの？」

目玉焼きの焼ける匂いがした。

「いない」

「昨日も食べてないんだから食べなさい」

急に母親っぽくならないですよ。反抗しているのが悪いみたいに思
えるじゃん。

匂いに誘われて、食べないという決意はすっかり揺らいでしまっ
た。不機嫌な顔のまま食卓に向かって、何も言わずがつついた。

「ユウさ、田中さんのことどう思う？」

お母さんは猫なで声をだした。田中ってのは「もどき」の名前。
どう思うも何も昨日言ったじゃない。私とお母さんの生活を邪魔す
る人。根暗で無口で不思議な存在。

「……」

「そんな顔しないでよ。田中さんはいつもユウのこと心配してんの
よ。年頃の女の子が夜に1人だと可哀想だって」

「どういう事？」

私は多分、凄い顔でお母さんを睨んだと思う。そろそろお母さん
って呼ぶのやめようか……。

「夜働くのやめようかなって。それでね、夜働けないとなると収入
が減るわけよ」

母は私の向かい側の椅子に腰をかけ珈琲をすすりながら続けた。

「田中さんがね、一緒に住もうかって」

冗談じゃない。バカにしないでよ！！　なんで今更なの？　小
学生の私がいくら頼んでも夜の仕事をやめなかつたくせに。私のこ
と心配だつて言ってるけど、結局「もどき」と結婚したいだけじゃ
ない。

「やめてっ」

勢いよく机をバンってやったら、お皿がすべってパリンツて音を
たてて壊れた。お皿にのつていた目玉焼きもぐちゃぐちゃになった。

後ろで母のため息を聞きながら、私は家を飛び出した。

大人は勝手だ。私の気持ちも知らないで。あんな人に生活を邪魔
されるくらいなら、私は1人でいた方がまし。いつその事心配なん
てしてもらわなくていい。

「おいっ。町田！　今日は早いんだな」

校門で山田に声をかけられた。

今、むしように腹がたつてんの。声をかけないでよ！

「ちよつと待て」

通り過ぎようとしたら、後ろから制服をつかまれた。他の子達は
私の事をジロジロ見ながら校庭の方へ歩いていく。クラスメイトも
何人が通り過ぎた。

山田が何か言う前に、原稿用紙5枚をかばんから取り出すと、投
げつけるように渡した。

「おまえー、その態度はなんだ」

山田が何か言いかけたので、走って教室の方へ逃げ込んだ。ちゃんと反省文書いてきたじゃない！生徒指導なんて言ってるけど、ただのいびりじゃん。もう私のことはほっというて！

教室に入った。さっき校門を通りすぎた子たちが、私の事を見てヒソヒソ話している。

いちいち反論するのも面倒くさいので、机に突っ伏した。

「おっはよー」

しばらくすると美穂がやって来て、私を揺り起こした。

「ね、昨日電話にも出ないから心配したんだよ」

「あ、ごめん。寝てたから」

「それにしても慎也ってやりすぎだと思わない？」

美穂は横目で机の上に偉そうに座っている慎也をチラッと見ると、小声でそう言った。

「ほんと。でも、相手にしてないから」

「へー！ユウって大人だね。私なんか昨日ユウが保健室に行ってから、腹がたって腹がたって、ずーっと慎也の事睨んでた」

美穂がする一つ一つの仕草が屈託の無いもので、とても純粋な存在に思えた。美穂は私の事を大人だと言ってたけど、そうじゃないただ冷めてるだけ。母がよく言ってた。あんたは子供らしくない。可愛くないって。だから、アイドルの写真を大事に持ってキヤーキヤー騒いだり、必死にソフトボールをやったりする美穂がうらやましい。何かに熱中したこと、今までに何も無い、私……。

「美穂、あのさ」

家の事、翔子さんのこと、急に相談したくなって喉元まででかかったけど教室に入ってきた茜の姿を見つけたのでやめた。

「どうしたん？ユウ」

「ううん。また一緒に買い物行こうね」

「もっちゃん」

美穂の笑顔がまぶしかった。

「茜おはよー」

美穂も茜の姿をみつけたようで手を振った。今日は機嫌が悪いらしい。小さい声でおはようと言うと、私達の方へは来ず前から2番目の自分の席に座った。

「ねー、気になってただけだよ、茜って小学校の時からあんなにだつたの？」

「あんなん？ あーうん。機嫌が悪いとあーなる」

「ふーん。最初は気がつかなかったんだけどさア。この前もね、私が宿題忘れたから写させてって言ったら、写したらすぐ返してねって怒られたんだよ」

美穂はまだまだ言いたい事があるって顔だつたけど、あや子先生が入ってきたので着席した。

「皆さん、おはようございます」

爽やかな声でそう言つたけど、その後に「町田さん大丈夫でしたか？」って言つたのが余分だつた。

「ブス、昨日サボつたのかよ」

案の定慎也が食いついた。本当になんなんだろう。

「松山君、まず町田さんに謝るべきなんじゃないかしら。それに、ブスって人の事を呼ぶのも失礼だと思うわ」

松山っていうのは慎也の苗字。あや子先生、慎也なんか言つても無駄だよ。

慎也は知らん顔して2つ向うの席からあっかんべーとした。

「困つた人ね」

あや子先生は顔を曇らせた。

「先生、社会見学の班を決めるんじゃないかなかったですか？ 時間なくなります」

めがねの学級役員が手をあげた。みんなざわざわとなつて、誰と一緒にになりたいとか口々に話しはじめたが、私にはどうでも良かった。青くて透き通つた風が教室に入り込んできて、ふと窓の外に目をやった。

早くここから出たい。そう思った。

8・金色の風

1日が過ぎるのが長く感じた。給食の時間が過ぎ5時間目などは睡魔に襲われ、コクリコクリとなつて、はつとして目を開ける。そんな感じだった。よつぽど、調子が悪いから保健室に行きますって言おうとしたけど、また慎也にからまれるのが嫌でやめた。慎也が怖いとかそういう訳じゃない。私は目立ちたくないだけのこと。

普通……。そう、普通にごはんを食べて、普通に学校に行つて、普通に帰る、大きくなつたら普通のOL。結婚して子供を生んで……そして、絶対子供には寂しい思いなんかさせない。そう決めてる。旦那さんは……普通の人かな？ うん、でも普通よりは格好いい方がいいに決まつてる。贅沢かア。

「はい、宿題のプリント。後ろの人に回していつて」

わら半紙で作られた手作りプリントが1枚ずつ渡された。

「はい」

前の席の尾崎君が振り返つてプリントを渡してくれた。そういえば、このクラスの人とあまりしゃべっていない気がする。いつも美穂か弥生か、気分がよければ茜の3人。3人が誰かとしゃべつたりすると、私はいつも自分の席にボーっと座つてたりする。

前の席の尾崎君は佐倉地区の子で、頭が良さそうな顔をしてる。いつも静かで目立たないけど、決してひ弱ではない。自分を持つてるといふ表現があつてゐるのかな？ 尾崎君みたいな旦那さんだったらいいかも。顔も悪いことないし。

そんなことを思い始めたら、急に尾崎君の背中をじーっとみつめてしまった。きつちりそろつた髪、清潔そうな制服。誰に対しても紳士的な彼。

恋は突然やつてくるって本か何かで見たけども、これが恋なのか？ だつたらいいな。

「はい、必ず宿題やつてくるように！ 忘れたら、運動場5周して

もらっからな。わかつたな」

「えー」

梅岡は言いたいことだけ言うと、チャイムと共に去りぬだった。

放課後、茜と自転車置き場で一緒になった。彼女にとっては予期せぬことで、何だか嫌そうな顔をしていた。きっと私の思い込みだろうと思って、遠足の班決めの話やら、この前美穂と買い物に行った話を話してみた。帰る方向が一緒なので自転車を押しながら一緒に進んだ。

「でね、この前美穂と行った店ね、写真なんかたくさんあるし…」

「うん」

「ね、どうしたん？ 茜げんき無いね」

「別に」

茜はそっけない口ぶりだった。昔っからそう。一度、私が茜に同じような態度をしたら、泣きながら謝って！ って言われて、その上クラスの女子みんなに私が酷い子だってことを言いふらした。

でも、なぜなんだろう？ 何で今まで友達だったんだろう。自分でもわかんない。ただ言えることは、彼女にとっての私は、友達でも何でもない。便利な道具でしか過ぎないってこと。言いすぎだろうか？ ううん違う。5年の時に茜がクラスの女子から総スカンをくらった時に、泣きついてきたのが茜だった。私だけしか話す人がいなかったんだと思う。6年になってやっとみんなから話してもらえるようになった茜は、私の母が夜の仕事をしているってだけで私を無視した。今までよく考えなかったけど、最近いろんな事がわかってきたような気がする。わかって？ 違うなア。そうだ、世界がみえて来た、この表現が一番あつてる。少しずついろんな部分が見えてきて、世の中には綺麗な部分も汚い部分もあるってことが分かってきた。

小さい頃は、何もかもが純粹で、綺麗な部分の中でキラキラと輝いていたというのに。

最近思う。人間は何も考えない、何も知らない方が幸せなんだったこと。

「ごめん私先行くわ」

茜は素っ気ないふりのまま自転車にまたがった。

「茜！」

「何よ」

私の強い口調に茜は驚いた様子だった。

「もうやめようよ」

「ユウ……何のこと？」

「友達ごっこ」

茜はその場でしばらく凍り付いてたみたいになってたけど、私はゆっくり深呼吸をして自転車を走らせた。風がふわりと舞った。

家に着いた。今日は「ただいま」は言わない。玄関の鍵は開いていたので奥に母がいるはずだけど、玄関からすぐの自分の部屋にそーっと入った。

「ユウ！ 帰ってきたの？」

見つかった。

「ただいま位、言いなさい。ほんとに可愛くない」

話したく無かったので、私はベッドに横になって知らん振りを決めこんだ。

昨日から寝てないので、ウトウトとしかけたけど、今晚の集まりのことを考えると、怖さ半分、興味半分でなかなか寝付けなかった。ハルって人にも会えるんだろうか。

30分くらいたったんだろうか。母が玄関から出て行くのを聞いた。怒ってたんだろう。私に声もかけず働きに出て行った。

ジリリリリリリ

電話の音がなって、私はベッドから飛び降りた。家にかかってくる電話はほとんどない。きっと翔子さんだろう。

「っはい。町田です」

翔子さんだ。自分でかけてきたのに第一声が「あ、お前、町田？」って。ほんと面白い。

「7時にさ、やっちゃんが仕事終るって言うから、8時頃迎えに行くよ。ダサイ服着てくんじゃねーよ」

「はいっ」

翔子さんは律儀な人だと思った。わざわざ迎えにくる時間まで電話してくるんだから。人間の価値は外見だけじゃないって台詞をよく聞くけど、本当にそうだと思う。茜なんか、連絡もせずに約束を破るくせに、クラスでは優等生で通ってる。勉強ができて、服装が真面目なだけ。何でこんなに熱くなってるんだろ。自分でも不思議なくらいだ。

それにしても、ダサイ服着るなって言われたけどどうしよう。不良が着るような服なんて持ってないしなア。

私が迷っていると、あつという間に約束の時間になり、10分くらい遅れて翔子さんたちがやって来た。アパートの前から爆音が聞こえたので、呼び鈴を鳴らさなくてもすぐに翔子さん達だとわかった。

スモークの張った黒い窓が開いて、やすさんっていう人が顔を出した。

「こいつか？ お前のダチって」

「こんにちは」

「あはははー。こんにちはだつてよ」

何がおかしいのか、やすさんは大笑いした。黒い髪にパーマ、二重の彫の深い顔が印象的だった。あの時の手紙のイラストによく似てる。ケラケラと面白そうに笑っているやすさんは子供っぽい感じだった。車に乗ってるんだから18歳は過ぎてんだろうけど。

翔子さんは後ろの座席のドアを開けて「乗りな」って言った。

「はい」

翔子さんは助手席に座ると、やすさんと何やら話しはじめた。

「ねえ、ユカリ……さんはあたし達の事知ってんの？」

翔子さんはやすさんと話す時は、幾分女らしく話す。

「ユカリは関係ねえよ。もう別れたしな」

「そっちは良くても、こっちがシメられたらどうすんのさ？」

「でも、お前もう俺の車に乗ってんじやん。集会にユカリが来るの知ってて乗ったんだろ？」

「まアね。あのババア最初っから気に食わねーしな」

「翔子ちゃんのそんな強気なところが好きー」

やすさんは私が後部座席にいるのにもかまわずそう言った。もしかしたら、私が乗ってるのを忘れてるのかも？　なんて思えるほどだ。

「なア、やんちゃんのこと……ユウどう思う？」

私が窓の外を眺めていると、急に翔子さんが振り返った。

ユウ。私はそう呼ばれて、なんか仲間として認められたんだなっ
て感じがした。

「うーん。やすさんってモテるんですね」

「そりや俺のこと放っておく女なんかいるはずないってや」

やすさんがふざけるのを横目で見ながら、翔子さんは続けた。

「あたし、マジでこの人好きなんだよね……」

こ、告白？　そう思った瞬間。道路の真ん中で急停止したやすさんの車。さっきまでのふざけた態度は消えて「俺も」って助手席の翔子さんを抱きしめた。後ろを走っていた車は、車線変更をし、追い抜かすときにやすさんの車を睨みつけた。

正直に生きている人たち。今まだよく分からないけどそう思った。学校も通り過ぎ、しばらく海岸沿いの道を行くと、閉店したパチンコ屋さんのただっ広い駐車場がみえてきた。その敷地の中にはすでに数台の車と10数台のバイク、そして男と女の姿がみえた。

「ユウ、今回ののは支部だけの集まりだからこんなもんだけど、本部の人らもきたらほんと、スゲーことになるぜ」

翔子さんは目を輝かせた。

「ふーん。そうなんですか」

「何だよユウ！ もっと感動しろよ」

何でも感動できる翔子さんがうらやましいです……。

ブンッ

って一瞬の出来事だった。私が光るライトやふざけている人たちを面白そうに見ていると、後ろから一台のバイクが横切った。

もの凄い速さだった。

「また、あいつう」

やすさんはそう言ってスピードを上げバイクを追っかけた。

「あつあぶねーだろー」

翔子さんは意外にも、スピードに弱いようで、しっかりとシートベルトをしている姿がかわいくみえた。

「くっそーハルの奴。奇襲攻撃かア」

やすさんはそう呟いて、バイクの後ろを必死に追いかけたが、途中で追っかけるのをやめた。

「あいつ、何考えてんだろうな」

やすさんはボソツと呟いた。

風みたいにフワッって飛んでったバイクは、また地面を滑るよう
にこちらにつっこんでくる。サイドミラーすれすれに逆走してくる
バイクにやすさんはついに降参した様子だった。やすさんはハンド
ルを左に切って、側道すれすれのところで車はようやく止まった。

「お前死ぬぞっ！」

やすさんは窓を開けながら大声で叫んだ。

「また、俺の勝ちっ」

そう言って覗いたやんちゃな顔。少しだけ目が合った。

9・集会

「翔子さん、あの人だ。手紙渡してくれた人」

「あーそっか、あれはハルさん。やつちゃんの大親友だよね、やつちゃ」

「うっせー。あんな奴知っか」

やすさんはさっきの事をまだ悔しがっていて、車を停めるなりハルさんのもとへ飛び掛って行った。私と翔子さんはしばらく車の中に居て、周りの人を窓越しで観察しながら、翔子さんが注意しなくちゃいけないことを事細かく教えてくれた。

「一応な不良は不良でも上下関係は厳しいからな、目上の人にはさんをつける事！それからあの棒を振り回してる赤い髪の奴、あいつには近づくなよ」

「なんで？」

「あいつは、手が早いんで有名だから。いいか？」

「あ、はい」

「それで、あいつらは仲いいから後で紹介すつとして、あーいたいた、あいつ」

翔子さんはもの凄く嫌な顔をして金髪のくるくるとパーマのかかった女を指さした。

「あれ、ゆかりババア。一応年上だからゆかりさんって呼んであげてんだけどさ、あいつ気に食わなくてさア。あんな奴、挨拶だけしたら相手する事ないからなっ」

「ゆかりさんって、やすさんの元彼女の？」

「お前、喧嘩売ってんのか、アン？」

「い、いや」

「とにかくな、あたしの傍にいなえとお前みたいなネネは、すぐにやられちゃうからな。氣イつけるよ」

翔子さんの表情がころころ変わるのが面白くて、ついつい顔を眺

めていた。翔子さんは説明だけすると、車を降りようとしてたけど、1つだけ聞きたいことがあった。

「あの、ハルさんって人は？」

「何だ？ ハルさんはさっきの金髪だって言っただろ」

「あ、うんそうじゃなくて」

「何だよ、周りにくいな」

「翔子さんとも友達なんですか？」

「友達？ ーそんなんじゃないな。やっちゃんとは仲いいけど。っていうかさ、あたしとやっちゃんも最近付き合う事になったわけじゃん。それまでは集まりで顔を合わすだけだったから正直どんな奴かわかんないけど、すごい硬派って話。ま、いわゆるやっちゃんとは軟派な方なだけだよ」

「ふーん。彼女とかいるのかな？」

「何だよお前。好きなのか？」

「ううん、違う。気になっただけ」

「はーん、やめとけよ。ハルさんはいつも彼女いねえ時ねえもん。あの顔だろ、硬派ときたら誰もほっとかないよ。上の方の人らもハルさん好きな人いるから、もしユウがハルさんと付き合うことになったら、半殺しでは済まなくなるな」

翔子さんは腕組みをしながら、上目使いで私の方を見た。

「ま、付き合うことなんかまず無いから安心しろよっ」って私の肩をポンってたたいた。

「お疲れっす」

しばらく翔子さんの後ろについて歩いた。会う人、会う人、挨拶をしながら通り過ぎた。ドラマで見たことがあるような格好をした人達の集団。何で、こんな所にいるのか自分でもわからなかった。バカ笑いをしている人、上目使いにこちらを見てくる人、いろいろだった。

「おい、翔子、挨拶なしかよ」

歩いていると後ろから女の人の声がした。

「あー、ユカリ……さん。お疲れっす」

翔子さんの眉間の皺が大変なことになっている。ユカリさんという人は少しぼつちやりとしていて、金髪のくるくるパーマで真っ赤な口紅をしていた。目の上には青いシャドー。何ともいえない威圧感があった。

「お前、やすと付き合ってたってな」

「……」

「ま、別にあんな男どうでもいいけど」

ユカリさんははき捨てるように言って、翔子さんの肩がピクつてなったのがわかった。

「どうでもいいんなら放っててください」

上の歯と下の歯がくつついた状態で翔子さんはそう言った。ユカリさんは翔子さんを挑発して楽しんでいるようだった。取り巻きの数からいって、ユカリさんの方がここでは身分が上なのかもしれない。翔子さんは思いつき感情を押し殺しているような感じだった。「お前の後ろにくつついてる中坊誰だよ？^{チューボー} ってかお前も中坊だったよな。あははっ」

「っるせー」

翔子さんは捨て台詞を残して、やすさんの方へ歩いて行った。

「くっそあいつ生意気だよな」

そんな声が後ろからした。ドラマの世界がここに広がってるような気がしてワクワクした。翔子さんはそんな私の姿を見て「お前、怖くねーのかよ？」ってビックリしていた。

1人で留守番してる時の方がよっぽど怖い。玄関のドアが開いて怪獣が入ってくるとか、殺人犯が逃げ込んでくるとか、小さい時からいろんな想像をして布団の中に逃げ込んだ。最近では慣れたけど、心霊特集なんかのテレビを見た後なんかの部屋は、薄紫色の煙が漂っているようで身震いがする。少なくとも、それに比べたら、何も怖いことなんかない。

だってここにいるのは人だから。

「おい、翔子、どうしたんだよ。そんな顔して」

やすさんは4、5人で集まっていて翔子さんに声をかけた。その中にはハルさんもいた。

「やつちゃん、何であんなババアと付き合ってたんだよ？」

「はーん？ やきもち翔子ちゃん」

「バカッ」

2人は付き合いはじめらしい。やすさんの仲間も面白そうに2人をからかう。私はふざけあう人たちを少し遠巻きから見ていた。

「んで、やつちゃったの？」

「のりっお前余計なことを」

やすさんはのりって呼ばれている角刈りのでぶっちょの男の人の頭をげんこつでぐりぐりとした。

「ユウ、こつち来なよ」

しばらくやすさんとじゃれ合っていた翔子さんは、離れたところにポツンという私を呼んだ。

「誰？ 小学生？」

「違うって。この子はユウ。ほんで、ユウ、こいつはヒロシ。ヒロシはあたしとタメだから」

「タメ？」

「そんなこともわかんねーのかよ。同じ学年っちゅうこと」

「ユウちゃんっていうんだ。翔子さんが連れてるってことは港南中か？」

ヒロシさんはきびがいつぱいあって、ちっちゃい目をしている。

「あ、はい」

「うわーかわいい。普通の子久々に見た」

「何だよそれっ。あたしは宇宙人かつ」

翔子さんはそう言うのとあとの2人を紹介した。

「この人がマブさんで、えーっとハルさん」

2人はこつちを見ると、少し会釈しただけだった。別に興味ない

という風に、また違う話をみんなで始めた。
疎外感とまではいかないけど、仲間に入れないのが少し寂しかった。

10・逃走

しばらく話に入れずに1人空を眺めた。キラキラと輝く星。ちっちゃい頃に、おじいちゃんとかぶと虫を採りに行った時に見た星に似ていた。おじいちゃん達と母は仲があまり良くないみたいで、私が小学校にあがった時くらいから遊びには行っていない。毎年贈られてきた誕生日プレゼントも、中学校に入ってから届かなくなつた。きつと母は愛情を受けて育ってないから、私にも冷たいんだつてつい思ってしまう。

――動物園の動物は赤んぼの育て方も分からなくて育児放棄することもあるのよ――

遠足で動物園に行った時、飼育係りの人が言った台詞をなぜだかよく思い出す。

「ユウ、何だよ。おなか空いたんか？」

翔子さんが心配して声をかけてくれた。

「うつん、だいじょうぶ」

「大丈夫じゃねえよ。絶対おなか空いてる顔だつて。バカだなア遠慮すんなつて」

翔子さんは勝手にいろいろと解釈をして、とうとう食べ物を買に行く話に発展した。

「やつちゃん。車出してくんない？」

「何だよ、着いたばっかだぜ。そうだ、ヒロシ！ お前めし買いに連れてつてやれよつ。ついでに俺にもジャムパン買って来てくれ」

「ええージャムパンっすか。お子ちゃまですねえ、やすさん。やすさんが車貸してくれるんだつたら俺行きますけど」

「ぶっけんなよ！」

そう言つてやすさんは車の鍵をヒロシさんに向けてポーンツと放

った。

「あ、痛えっ。この野郎っ！ やす」

運悪くハルさんの額に鍵が命中した。命中したと同時にハルさんはボコツと瞬時にやすさんに駆け寄り彼のお腹を捕らえていた。

「くっ……お前っ」

「ちよっ、ハルさんやり過ぎっす」

ヒロシさんが止めに入った。他のメンバーは、またいつもの事だと言わんばかりに冷ややかに見つめていたが、とても高校生には見えない髭のマブさんにいたっては、タバコをふかしながら咳き込むほどゲラゲラと大笑いを始めた。

「おあいこじゃんっ」

ハルさんは悪びれた様子も無く言い放った。やすさんはかなり痛そうにしている。

「連れてってやるよ」

ハルさんが来いって目で合図をした。切れ長の綺麗な目だと思った。

「お前襲うなよ」

他のメンバーが囁し立てるのを一蹴するようにハルさんは言った。

「こんなガキ襲うかよ」

もつと違う表現でも良かったのに。ハルさんの言葉に軽くショックを受けた。

「ふり落とされんなよ」

バイクが走りだすと、私の背中ごしにからかうようなやすさんの声が響いた。

意外にもハルさんはゆっくりと走ってくれていた。後ろから追いかけていく車を眺めながら風が流れるのを感じた。

夜の景色、夜の風、そしてハルさんの髪の香り。ハルさんの腰に

手を当てて後ろに載っている自分が不思議でしうがなかつた。

結局、5分ほど走って着いた店で、ハルさんは、やすさんのジャムパンとお菓子など、メンバーの分を手当たり次第に入れていった。「お前は？」

ハルさんが私の顔を覗き込んだ。

はじめてハルさんと話す。ふわふわの金髪、切れ長の目、細いあご。

私は緊張してしまつて、思わず目の前の「金さんラーメン」をかごに入れた。

「アホか」

ハルさんはそう言つて、私が入れた「金さんラーメン」をかごから取り出すと元の棚に戻した。

「湯、どこで入れんだよつ。変わった奴だな」

「あ」

「つたく、ガキ！」

ハルさんは言葉の割りにはニコニコと笑つていて、笑うとのぞく八重歯は発見だった。クラスの尾崎君とは違う、何だろう。この気持ち。

今もの凄くドキドキしている。

お金を払っているハルさんを後ろでみつめながら、翔子さんの言葉を思い出した。

――ハルさんはいつも彼女いねえ時ねえもん――

そうだよなあ。同じ空気を吸えば吸うほどハルさんの格好良さが、体に染みていく感じがする。緊張はしてるけど、それが逆に心地よくて、ずっとこうしていたいって感じ。

私の今の想いは、一時のものなんだろうか？

「お前、これ持てる？」

大量の食べ物が入ったビニール袋を手渡され、片方の手でハルさ

んにしがみつき、片方の手に袋を持って、ハルさんの後ろにのつかった。

相変わらずバイクはゆっくりで、やすさんと競争していたハルさんとは別人の様だった。

カサカサカサカサと風をうけ音をたてるビニール袋。片手でつかまっているの、自然と力が入る。気がついた時にはハルさんの背中に顔を押し付け、体全体につかまっていた。

「おいっ。力入れすぎだろ」

「あ、うん」

「お前、ガキのくせに胸はあるんだな」

「……」

ひゃあー。誰が硬派だって言ったの？

私は思わずハルさんの背中から離れると、上体を反らした。

くつくつくつくとハルさんは笑っているようだった。

不意に後ろから拡声器のウィーンッっていう大きな音に続いて「この坊やたちー、ちょっと止まりなさい」って声が鳴り響いた。

「やべっ。ポリかよ」

私がチラッと視線を後ろに向けると、パトカーがついて来ているのがわかった。

「しっかりつかまれよ」

ハルさんはそう言うとおもむろにスピードを上げた。

さっきまでカサカサ鳴っていたビニール袋は風を含んでバツバツサと大げさな音をたてた。

「……るよっ」

「え？」

スピードを上げれば上げるほど、風の音で全く声が聞こえない。めまぐるしく消え去っていく景色。私は目を開けて、流れて消え去っていくライトを見た。異次元にいるような感覚だった。

執拗に追いかけてくるパトカーを振り切るように、バイクはどんどんスピードをあげていく。さすがにスピードがMAXまで達する

と、落ちはしないかという不安が頭をかすめ、ハルさんの腰に巻いた自分の手がしびれるほど力を入れた。

丁度目の前に大型トラックが立ちふさがった。パトカーもすぐさま追いつき、トラックとパトカーにはさまれるような形になった。

「くそっ」

トラックが左に指示器を出した。

減速しないとトラックにぶつかってしまう。しかし、減速すれば、パトカーに周りこまれつかまってしまう。

ブーーン

ハルさんは減速するどころか、スピードをあげた。曲がろうとするトラックの左に周りこみ、気がつくとバイクはトラックの前方に躍り出た。

ファンファンファンファン

トラックのクラクションが鳴らされる。轟音が背中を押す。スピードをあげているのに周りはスローモーションで幻覚を見ているような感覚に襲われた。

パトカーも負けてはいない。追い越し車線からトラックを抜くとバイクの横に並んだ。

「いいかげんに止まれっ」

明らかに警察も動揺している様で、先ほどとは全く違う怒号ともとれる声で叫んだ。

「……なげろっ」

ハルさんが何か指示を出している。

「え？」

「なんでもいいから投げろっ」

ハルさんの言われるまま、片手でビニール袋の中にあるジャムパンをパトカーのフロントガラスに向けて投げた。

ジャムパンはフロントガラスに命中した。袋はぱすつと地味な音をたてて破れた。

「ポテトチップスもあつたら」

「うん」

私はハルさんの背中と自分の体の間にポテトチップスの袋をはさみ、片手で封をきった。

ハルさんは加速し続け、パトカーの前方に車線変更をした。

「いいぞ。今だ」

ハルさんに言われるとおり、袋を持ってパラパラパラとポテトを撒き散らした。

桜吹雪のように散るポテトがパトカーの視界を一瞬だけ遮つてくれた。

「あっはははは」

ハルさんはミラー越しにそれらを見て大笑いした。

地味な作戦ではあったが、奇襲攻撃が良かったのか、パトカーはひるんで減速した。

「やりー！」

ハルさんは気をよくしたのか、大声で叫んだ。

「ユウ！ 逃げるからな、つかまれ」

段々と回復して速度をあげるパトカー。しかし、パトカーがひるんでいる間にバイクとの距離は離れ、とうとうハルさんは逃げ切った。

はあはあはあ……あっははははは

久々に大笑いをした。

10・逃走（後書き）

これはフィクションです。

良い子の皆様は真似をしないようにしてください；

11・香里さん

私たちが戻つてくると、やすさんがツカツカとやってきた。

「おいっ。何してたんだよ、お前ら」

「何って、ポリに追っかけられてよ」

周りがざわめきたつ。

「ハル！ お前アホか」

「あん？」

「ポリがけつにひつついてたらどうすんだよ。集会してんのバレるやないかっ」

ハルさんは一瞬いたずらな笑顔を浮かべた。

「ポリやつ！ バツくれろ」

みんな逃げる時は早い。遠くの方に居た人たちも、こちらの動きを察知してか、瞬時にバイクにまたがった。やすさんは慌てて車の方へ走って行くところだった。

「くんちゃって。うっそだもーん」

「んのやろーてめえ」

やすさんは走って戻ってきて、また、ハルさんと喧嘩がはじまった。

私はまだ、バイクに乗ったまんまでその様子を見ていた。

「いつまで乗ってんだよ！」

後ろから、翔子さんとは違う声がした。かすれた女の人の声。ゆかりさんっていう人とも違う。威圧感のあるその声に、私はバイクを慌てて降りて振り返った。

茶髪のパーマが多い中、その女の人は真っ直ぐな黒髪のワンレングスで、髪の毛は胸の当たりまで伸びていた。その強い眼差しに私は目をそらした。

「香里さん、すいません」

慌てて翔子さんが駆け寄り謝った。

香里さんと呼ばれる人は、ふんつと髪の毛をかきあげると私には背を向けてハルさんの方へ体を向けた。

「久しぶり」

「ああ」

呆然と二人を見ていた私に、翔子さんが「ジロジロ見なさんなっ」っておばちゃん口調で言って、私の服の裾を引っ張って離れたところへ連れていかれた。

「綺麗な人……」

ついつい見とれてしまうような黒髪に華奢な体。遠くから香里さんとハルさんの姿をボーっとみつめた。

「だから、ユウ、ジロジロ見んなって」

「だって凄い綺麗」

「香里さんは別格や」

ハルさんと香里さんが何か話している。似合いの2人。やっぱり気になる。何だろうこの気持ち。私の気持ちに気付いているのかいないのか、翔子さんは香里さんについて話しはじめた。

「港南連合に本部と支部ってのがあって話しただろ？ 香里さんの彼氏は涼さんっていうんだけど、もともとは本部の偉いさんだったらしくって。独立みたいな形であたし達のいる支部を作ったってわけ」

「ふーん」

「本部は喧嘩上等な人が多いんだけど、こっちは走り命って感じ」「涼さんって、じゃあここでは一番偉い人なの？ ね、誰？ 誰？」「涼さんって軽々しく呼ぶんじゃないって。それにな、支部長は滅多に来ねえよ」

長い間、ハルさんと香里さんは話している。それも真剣に。何話してるんだろう？

「何で香里さんはハルさんと喋ってんの？」

「知るかつ。つーかさ、おめえいつからタメ語きくようになったんだよ！」

翔子さんはどうでもいい所でキレル。

「あ、えーっと、香里さんがハルさんと一緒にいるのは、どうしてなんでしょうか？」

「そりゃ友達だからだろ。同じ中学校だったって話。でもなあ、ないんかその敬語ムカつく」

「……」

怒った翔子さんの顔はやっぱ怖い。でも、香里さんの迫力には負ける。

「ユウさ、もしかしてハルさんに惚れちゃったか？」

「ううん」

わかんない。今はただ気になる。それだけ。

私が翔子さんと話している間、前や後ろをいろんな人が通りすぎた。翔子さんは中学生ってこともあって、ここでは下の方みたいだけど、やすさんと付き合ってるって事で、上の人らにも声をかけられていた。

「翔子さん」

「ん？」

「気になったんだけど、集会って何するの？」

「おめえまた、タメ語かよっ」

翔子さんは呆れたようにため息をつく。「集会ってよ、仲間に来るつつう感じかな」と呟いた。私はてつきり、ドラマで見たようにバイクで走り回ったり、何か話し合ったりするもんだと思ってたので、少々拍子抜けをした。

「まあ、うちん所は割りとフレンドリーだけどな。本部なんかは女は集会に入れてくれねえし、あたしら中坊なんかも入れてくれない。厳しいんだぜ」

「不良も大変なんだ」

「何だよユウ、お前変わってんな」

翔子さんは何本目のタバコに火をつけてふかしはじめた。

私の視線の先にはハルさんと、香里さんの姿がある。もっともっ

とハルさんについて知りたい。もう一度、彼の後ろに乗りたい。そう思った。

香里さんと話すハルさんは、少し重たい表情でふざけた様子は全然みられなかった。

何を話してるの？

香里さんはハルさんから離れて、ゆかりさんのいるグループの方へ歩いていった。私は香里さんの姿を目で追った。ゆかりさんは頭を下げてコチコチに固まっている。

「あつはは、ばああの野郎。ガツチガチになってやんの」

翔子さんはその様子をみて大笑いしていたけど、香里さんがこちらに向かつてくるのがわかると、翔子さんは慌てて吸っていたタバコの火を消すと直立の姿勢をとっていた。

「翔子、久しぶりだね」

「は、はい久しぶりっす」

間近で見る香里さんは、やはり綺麗すぎるくらい綺麗で、人形を見ているようだった。かすかに漂う甘い香水の匂いが香里さんを包んでいた。

香里さんは私の事など眼中にないという感じで、翔子さんだけを見て話した。

「あんた、これからは集会には来ない方がいい」

翔子さんの顔色が変わった。

「んで……？ あ、あたし何か悪いこと……」

「そんなに驚くなつて。あんただけじゃなくてさ、ゆかり達にも言つといたから」

「でも、なんで？」

「本部の総長があたま変わっただろ、そいつ涼と仲が悪くて、支部のことも最初っから認めてなくなつてさ」

「はい」

「ぶっ潰すって言ってる連中もいて……あんたらがいる時に、本部の奴らが乗り込んできたら、確実に足でまといになるだろ」

「はい」

「ハルにも伝えた。涼が本部と話をつけるまでは、集会は控えて。わかったか」

「は、はい」

翔子さんは香里さんの姿が遠ざかるまで、ずっと硬直していた。

「ふーっ。緊張するぜっ。なっユウ」

「格好いいー！」

「おい？ ユウ？」

私は一日で夜の街に溺れてしまった様だ。

12・対決

香里さんが待たせている車に乗り込み去って行くと、ハルさんの所へ人が集まりだした。

みんな、ハルさんが口を開くのを待っていたけど、角刈りで太ったのりさんは、少し急いたように口火を切った。

「涼さんは？」

「しばらく、本部が忙しいってよ」

ハルさんは少し面倒くさそうに言った。片手をズボンのポケットにつっこんで、首を傾けている。

「それにしてもよ、最近涼さん俺らのことなんか、どうでも良くなつたんじゃないの？ 本部、本部ってよ」

赤い髪の人が言う。かなり挑発的な態度だと思った。

「海藤^{かいどう}！ てめえ、涼さんのことそんな風に思ってるのかよ」

やすさんが海藤と呼ばれている赤い髪の男を睨むと、髭のマブさんも参戦した。

「誰がこの支部を作ったんか、もう忘れたんかつ！ あほ」

「んだと？ お前ら涼さんに気に入られてるからって偉そうにすんじゃないねえ 俺は涼さんについてきただけで、お前らに指図される覚えは無いんじゃない」

海藤さんの後ろにいる背の高い男の人2人が前に出てきた。顔がよく似ていて初対面でも双子というのが私にも分かった。その、海藤さんの周りには双子のほかにも5、6人がいて、何やらものものしい雰囲気でハルさんのグループを睨みつけていた。

「やんのか？ こらっ」

やすさんは一歩前へ出て、戦闘姿勢をとると、海藤さんも待つてましたとばかりに前へ出る。手につかまれた鉄の棒……。

あんな棒で殴られたらどうなっちゃうんだろう？ 私はゾツとした。

「仲間割れしてる場合じゃねーだろ」

マブさんが、やすさんと海藤さんの間に入り込む。

ハルさんはやはり何もなくて、面倒くさそうに体を傾けたまま
でいる。

「仲間割れ？ は？ 仲間なんて思ってたなんかねえよ。集会つって
もガキがチャラチャラするんで走ってるってだけで面白くねえんだ
よっ」

海藤さんはカッツとつばを吐き捨てた。

「んだところあ！」

下顎を突き出して睨むやすさんの額には、血管が浮き出している。
でぶつちよのりさんやら、ヒロシさんもやすさんの後ろに立ち参
戦する。

海藤さんに握られた鉄の棒があがる。

「ユウ、ユウ、やばいよ。やつちゃんあんなんで殴られたら」

横の翔子さんの声は震えている。

私は意外と冷静だった。まるでドラマを見ているような感覚で。

現実が現実を感じられないのは今に始まった事じゃない。よくある
事。それは、時には都合が良い。自分が体験してるはずの嫌なこと、
怖いことが現実では無くなるから。嫌なこと、辛いことは全部ブラ
ウン管の中で起きていることで、私には関係ないと思うようにして
きた。

ずるいかもしれないけど、そうやって生きてきた。だって楽なん
だもん。

だから、何も感じたりしないし、冷静でいられる。でも。言い返
せば、私は何かに強く心を揺さぶられたりした事が無い。そう、感
動ってゆうやつ。

感動の無い毎日は淡々と過ぎて、時々だけど、生きてる意味あ
んのかなんて思う。時々？ うっん……多分違う。

私の生きてる意味って何？

「喧嘩やりてえなら、よそに行けよ」

今まで面倒くさそうに構えていたハルさんは、海藤さんの鉄の棒が振り落とされるかという一瞬の隙をぬって、やすさんとの間に入った。

人ばかりでよく見えない。

カンカラカンカンカン

鉄の棒が転がる音がした。

「なっ……」

双子の男の片方が素っ頓狂な声をあげた。

そこにはおなかを押さえて地面にうずくまる海藤さんの姿。

「すきだらけだな」

ハルさんはやんちゃな顔で笑って、驚いてるやすさん達に向かってピースサインをした。

「お、おい。ハル……血、血」

やすさんの言うとおり、ハルさんの額からは血が伝っている。

ハルさんは全く気にもとめずバイクの方へゆっくり歩いて行った。
「走ってくる」

ハルさんは手をあげてバイバイをすると、猛スピードで大通りを駆け抜けた。

真っ直ぐに、真っ直ぐに。

その後ろを、慌ててのりさんヒロシさんマブさんって感じで、皆がハルさんの後ろに続いた。

「ユウ、何眺めてんだよ。早く、車に乗れよ」

翔子さんがやすさんの車の助手席から身を乗り出して私を呼ぶ。

私はボーっと突っ立っていて、翔子さんがやすさんの車に乗ったこともわからなかった位、ただあっけにとられていた。

車に乗ったあとも、こちらを睨む大男2人と鉄棒男、悔しがる数人の男をみつめた。

「ハルさんって強いんですね」

とっさに思っていることが口に出た。

「あいつにいいとこ全部もってかれたな」
やすさんは呟いた。

「ハルにはかなわねえよ」

フロントガラスの向う側を、身を乗り出すように見入ったけど、もうすでにハルさんの背中のみえなくなっていた。

もう一度会いたい。

それが、集会の感想。

「なあ、こつからどうする？」

やすさんは翔子さんの肩に手をおいて、意味ありげにささやいた。
「つんだよ。突然触んじゃねえよ」

翔子さんはビクツとしたので、やすさんはケラケラ笑った。

「可愛いんだ、翔子ちゃん」

「うるせえっ。バカにすんじゃねえよ」

「てれてる？」

「バカッ」

そんなわけで2人には後部座席の私という存在は無いらしい。き
やつきやとじゃれ合う二人を少しうらやましく思った。

「あ、そうだ。マブさんとは？ あそこ落ち着くんだよなあ」

やすさんが思い出したように言った。

「そっか、そうしょっか」

「ねえ、ユウさ。どうする？ お前も行く？」

翔子さんが、やっと私の存在を思い出してくれたようだ。

「今、何時？」

「えつとな、0時40分」

そんな時間が経ってたなんて思いもよらなかった。何て楽しく
て、スリルがあつて、そして寂しく無い夜。

「お母さんが2時頃帰ってくるから、私も帰る」

「お母さんだつてよ。お前可愛いな」

翔子さんは変なところで寝める。
結局、家に着いたのは午前1時だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2738e/>

あの日に。

2010年10月14日18時37分発行